レビ記3章 「交わりのいけにえ」

1A 牛 1－5
2A 羊 6－11
3A 山羊 12－17

本文

レビ記 3 章を開いてください。私たちのレビ記の学びは、三つ目のいけにえ「交わりのいけにえ」に入ります。主が聖なる方なので、私たちも聖なる者として歩むように召されています。その時に大事なのは、「献げる」ということです。主がキリストにあってご自身を私たちに献げてくださいました。その憐れみの中に私たちは入ります。したがって、私たち自身を、生ける供え物として神に明け渡します。しばしば、「都合がよくなったら献げます」と態度を人は持ちます。けれども、そうすれば神がキリストにあって全てを献げてくださったこと、そこにある愛は分かりません。神がしてくださったことに、私たちが呼応し、応答しなければ、そのすぐれたいけにえであるキリストを、知ることが出来なくなるのです。

そこで、全焼のいけにえがあります。牛、羊、あるいは鳩を献げますが、すべての部位を祭壇の上で火に焼きます。その匂いが、神にとって香しいもので、神は喜ばれ、快く受け止めてくださっています。そこには、キリストが私たちの罪のために十字架に至るまで、父のみこころを行うために献げられた姿が現れるのです。それに合わせて、穀物のささげ物があります。小麦粉なり、あるいは調理したパンを献げますが、油が混ぜ、また注ぎます。その、動物のいけにえに添えられるようにしてささげる穀物は、いのちを示しています。キリストが、ご自身をすべて父なる神に献げると、神がこの方をよみがえらせ、いのち溢れるようにしてくださいました。キリストに結ばれている私たちは、自分自身に死に、この方に献げる時に、キリストのいのちが同時に働くのです。そして、そのいのちは、油が示している聖霊によって注がれています。

このように、キリストの死といのちにあずかっている生活の中で、私たちは神の望まれる、聖い生活を歩むことができるのですが、もう一つの大切ないけにえがあります。それが、「交わりのいけにえ」です。自発的に献げるいけにえとしては、先の全焼のいけにえ、穀物のささげ物に次いで、主との交わり、また主にある互いの交わりがいかに大切なのかを教えてくれます。

1A 牛 1－5

[1] そのささげ物が交わりのいけにえの場合には、献げようとするのが牛であるなら、雄でも雌でも傷のないものを主の前に献げなければならない。

「交わり」という訳ですが、以前の新改訳の版では「和解のいけにえ」となっていました。「平和のいけにえ」とも訳せるものです。シャロームと同じ語源の言葉が「シャレム(שָׁלֵם)」というものです。主にある豊かさの中で、平和と交わりを楽しんでいる意味合いを持ちます。喜んだり、感謝したり、または賛美したり、そして何よりも共に食したりしている時の楽しさです。兄弟たちと共にいることが、いかに楽しいかを、詩篇の著者は話していましたね。「133:1 見よ。なんという幸せなんという楽しさだろう。兄弟たちが一つになってともに生きることは。」

主に自分自身を献げ、キリストにあって生きている者たちの間には、このような喜びと平和と、互いに一つになっている豊かさが用意されています。そして、この交わりを保つことが、神の聖なるみこころです。神とキリストとの交わりにあずかり、その交わりにあずかる中で、互いに交わっています。「Ⅰヨハ 1:7 もし私たちが、神が光の中におられるように、光の中を歩んでいるなら、互いに交わりを持ち、御子イエスの血がすべての罪から私たちをきよめてくださいます。」

交わりのいけにえの特徴は、あるいは全焼のいけにえとの違いは、一部を神に献げ、残りを民が受け取ることです。ここレビ記 3 章では、主なる神に献げることだけが書かれていますが、7 章には、民が残りを食べることが前提で書かれています。神は、脂身の部分と腎臓の部分を祭壇で献げます。けれども、肉は人が食べます。アロンとその子ら、祭司たちが、胸肉と右ももを食べます。残りは献げる民が食べます。そのことによって、ちょうど神と共に同じいけにえを食べている、ということになり、神と一つになっていることを示しているのです。

今の中東の人々もそうですが、聖書時代は、食事というのは平和を示していました。ヤコブがラバンの家から出て行き、ラバンが追いついて危うくラバンがヤコブに危害を加えようとしましたが、そこで石塚を立てて「ミツパ」と呼びました。お互いにその境界線を越えて危害を加えてはいけない、という証拠です。そしてその契約を結んだ後でヤコブとラバンはいけにえをささげて、食事を共にしています（創世 31:54）。食事をしている時に、争ってみてください。文字通り、お腹が痛くなるでしょう。食欲がなくなるでしょう。同じものを共に食べている時には、そこに和解と平和がなければ食べられないからです。

そして、当時の一般の人たちにとって、肉を食べるというのは非常にまれでした。申命記には、主への祭りの時に、いけにえの肉を貧しい人々に分け与えることについて主が命じておられます。したがって、貧しい人たちにとって交わりのいけにえは、非常に特別な時です。それはあたかも、私たちがまれにしか得ることのできない、主にある交わりの時になぞらえることができるでしょう。久しぶりに会う、愛する兄弟姉妹との出会いであるとか、カルバリーチャペル全体で集うカンファレンスであるとか、そこにある喜びと楽しみはかけがえのないものです。

主が、ラオディキアの教会の人々に対して、悔い改めを呼びかけられましたね。「黙 3:19-20 わ

たしは愛する者をみな、叱ったり懲らしめたりする。だから熱心になって悔い改めなさい。見よ、わたしは戸の外に立ってたたいている。だれでも、わたしの声を聞いて戸を開けるなら、わたしはその人のところに入って彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。」悔い改めの後にある恵みは、主との交わりです。

ですから、私たちが普通に考える平和と、主の平和は相当違います。「私には特に問題がありません」というような態度、自分でやっていけますというような態度が、いかに主との交わりを壊し、また主にある互いの交わりを壊しているかを知らないといけないですね。自分だけで作り上げた空間の中で生きていれば、神の望まれる平和とは程遠いものです。また、単に楽しみがあればいいというものではなく、主に献げ、そのいのちにあずかっている者だからこそ、天から与えられる豊かさがあります。

この 1 節には、いけにえは雄と雌の牛のどちらも良いことになっています。全焼のいけにえの雄のみとは大きな違いです。これは、ここから、一つの御言葉を思い出します。「ガラ 3:28 ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由人もなく、男と女もありません。あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって一つだからです。」私たちの間にはさまざまな隔ての壁があります。性別の違い、民族や宗教の違い、経済的格差などがあります。けれども、各人がキリストを主とあがめているのであれば、そこにある壁が一気に崩れて、その他の方法では決して味わうことのできない一体感を味わうことができるのです。

2 まず、ささげ物の頭に手を置き、それを会見の天幕の入り口で屠り、祭司であるアロンの子らがその血を祭壇の側面に振りかける。

全焼のいけにえと同じように、ささげ物の牛には、頭に手を置きます。これは、その牛がこれから屠られるのですが、自分自身の身代わりに死ぬことを思うためです。一つになっていることを、手を置くことは示しています。そして、血を祭壇の側面に振りかけます。血が注がれる事によって、神との交わりの決め手となる、キリストの流された血を示しているからです。「Ⅰヨハ 1:7 もし私たちが、神が光の中におられるように、光の中を歩んでいるなら、互いに交わりを持ち、御子イエスの血がすべての罪から私たちをきよめてくださいます。」

そして、私たちの間の壁も、キリストの十字架によって取り外されました。「エペ 2:14-16 実に、キリストこそ私たちの平和です。キリストは私たち二つのものを一つにし、ご自分の肉において、隔ての壁である敵意を打ち壊し、様々な規定から成る戒めの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、この二つをご自分において新しい一人の人に造り上げて平和を実現し、二つのものを一つのからだとして、十字架によって神と和解させ、敵意を十字架によって滅ぼされました。」主ご自身が交わりのいけにえ、平和のいけにえになってくださり、私たちはこの方がご自身の肉体で、互

いから来る敵意を取り去られました。そして、一人の新しい人に造り上げられます。私たちは日本人の前にキリスト者です。そして、他の国の人も、その国の人である前にキリスト者です。新しい、一つのからだになったのです。

それを、はっきりと示しているのが、聖餐式です。聖餐式は、とかく少ないパンを食べ、杯も少量ですが、それは過越の食事の一場面であり、食事そのものが礼拝でありました。パンを食べる時は、主の裂かれたからだを覚え、ぶどう酒の杯にあずかる時は、流された血にあずかります。それによって、キリストにあって私たちは一つであることを体得するのです。「Ｉコリ 10:16-17 私たちが神をほめたたえる賛美の杯は、キリストの血にあずかることではありませんか。私たちが裂くパンは、キリストのからだにあずかることではありませんか。パンは一つですから、私たちは大勢いても、一つのからだです。皆がともに一つのパンを食べるのですから。」

このようにして、到底、接点の持てないような人々と、キリストにあって一つになり、愛しあい、仕え合っている時、神の聖さにあずかっているのです。

3 次に交わりのいけにえから、主への食物のささげ物として、内臓をおおう脂肪と、内臓に付いている脂肪すべて、4 また、二つの腎臓と、それに付いている腰のあたりの脂肪、さらに腎臓とともに取り除いた、肝臓の上の小葉を献げる。5 アロンの子らは、これを祭壇の上で、火の上の薪の上にある全焼のささげ物に載せて、焼いて煙にする。これは主への食物のささげ物、芳ばしい香りである。

先ほど話しましたように、交わりのいけにえは、「主への食物」という側面があります。主ご自身に献げるのは、脂身のところと、腎臓です。なぜ脂肪のところ、そして腎臓は主の食物の部分になるのか？3 章の終わりのところで、調べて行きたいと思います。そしてこれらを献げると、主が芳ばしい香りとして受け入れています。私たちが喜び楽しむだけでなく、主ご自身が喜んでおられます。

2A 羊 6－11

6 交わりのいけにえとしての、主へのささげ物が羊であるなら、雄でも雌でも傷のないものを献げなければならない。7 ささげ物として献げようとするのが子羊であるなら、それを主の前に連れて来る。8 そして、そのささげ物の頭に手を置き、それを会見の天幕の前で屠る。アロンの子らは、その血を祭壇の側面に振りかける。9 そして、その交わりのいけにえから、主への食物のささげ物としてその脂肪を献げる。すなわち、背骨に沿って取り除いたあぶら尾すべて、内臓をおおう脂肪、内臓に付いている脂肪すべて、10 また、二つの腎臓と、それに付いている腰のあたりの脂肪、さらに腎臓とともに取り除いた、肝臓の上の小葉である。11 祭司は祭壇の上で、それを食物として、主への食物のささげ物として焼いて煙にする。

全焼のいけにえの時と同じように、その人の経済的状況に応じて牛よりも安価な羊を献げることができるようにしてくださっています。どのような経済的状況の人でも、主へのささげ物がささげられるようにしておられます。主の民にとって、貧富の差が主との交わりを妨げることがないようにしないといけない、ということです。

そして、屠る手順は牛の場合と同じです。全焼のいけにえの時も、交わりのいけにえの時も、犠牲の動物が「傷のないもの」でなければいけません。これは、キリストもご自身に傷やしみのない方、罪を犯されなかったし、罪の性質も持っておられなかった方を表しています。（1ペテロ 1:18-19 参照）

3A 山羊 12－17

12 そのささげ物がやぎであるなら、それを主の前に連れて行く。

牛、羊の次はやぎです。経済的な状況で、やぎが最も安価なものです。

13 そして、ささげ物の頭に手を置き、それを会見の天幕の前で屠る。アロンの子らは、その血を祭
壇の側面に振りかける。14 そして主への食物のささげ物として、そのいけにえから、内臓をおおう
脂肪と、内臓に付いている脂肪すべて、15 また、二つの腎臓と、それに付いている腰のあたりの脂
肪、さらに腎臓とともに取り除いた、肝臓の上の小葉を献げる。16 祭司は祭壇の上で、それを食物
として、芳ばしい香りのための食物のささげ物として焼いて煙にする。脂肪はすべて主のものであ
る。17 あなたがたがどこに住んでいても代々守るべき、永遠の掟はこれである。あなたがたは、い
かなる脂肪も血も食べてはならない。」

ここではっきりと、「脂肪はすべて主のものである。」とあります。脂肪も血も食べてはならないとありますが、血については、いのちそのものであることを私たちは学びましたね。ですから、血を食べることは、いのちそのものをないがしろにすることです。そして、キリストの流された血を、ないがしろにすることに他なりません。では、なぜ主が、脂肪の部分を献げ、民が食べてはいけないかを考えてみたいと思います。

聖書の中にある脂肪の単語を調べますと、同じヘブル語が「豊か」と訳されているところが多いです。例えば創世記 45 章 18 節を読みます。「あなたがたの父と家族を連れて、私のもとへ来なさい。私はあなたがたに、エジプトの地の最良のものを与えよう。あなたがたは、地の最も良い物を食べるがよい。』」ここの「最も良い物」というのが、「脂肪」と同じ単語です。したがって、脂肪はひとえに「豊かさ」を表しています。

ですから、脂肪は主のものである、という神の発言は、「豊かさはすべてわたしから来るのだ」と

いうことを言い表しています。脂肪はすべて献げ、人々が肉だけを食べる時に、彼らは、「主からのみ、豊かさが来るのだ」ということを実感して食べていたことでしょう。もしそれを自分が食べるなら、「私が豊かさをもたらす」ということになります。これは、言わば人の高慢であり、聖書には、人の高慢な心を、脂肪のような鈍い心に例えています。「詩 119:70 彼らの心は脂肪のように鈍感です。しかし私はあなたのみおしえを喜んでいます。」

パウロがこう話しました。「Ｉテモ6:17 今の世で富んでいる人たちに命じなさい。高慢にならず、頼りにならない富にではなく、むしろ、私たちにすべての物を豊かに与えて楽しませてくださる神に望みを置き、」いかがでしょうか、私たちは自分が平均的な生活を歩んでいると思っています。自分が富んでいるとあまり考えないでしょう。けれども、自分自身を神に献げることをしていなければ、自分の仕事を優先させて神に献げることをしていなければ、「私の生活は、私が貯めた金、私が働いた報酬。神から来たものだとは考えていない。」と言っているのと等しいです。それはまさに脂肪を自分で食べる行為であり、神が忌み嫌われることなのです。

豊かになることが罪なのではありません。その豊かさを神から来ていることを認めていないことが罪なのです。すべての良き物は主から来ています。それに感謝しているでしょうか？主に献げているのでしょうか？それが、脂肪を主に献げるところの意味です。

最後に、腎臓のことも考えます。聖書の中では、「心の奥深い部分」を指していることが多いです。「箴 23:16 あなたの唇が公正を語るなら、私の心は喜びに躍る。」ここの「心」は、まさに腎臓です。心が、私たちが考えるような心臓の部分ではなく、腹の奥で感じ取るということで腎臓を指しています。そして、新約聖書でもギリシア語で腎臓を意味する言葉を、心の深い部分を指す時に使っています。「黙 2:23 また、この女の子どもたちを死病で殺す。こうしてすべての教会は、わたしが人の思いと心を探る者であることを知る。わたしは、あなたがたの行いに応じて一人ひとりに報いる。」ここの、「思い」というのが、腎臓になっています。

したがって、腎臓を主に献げるということは、心の奥がすべて主のもので満たされている状態を言います。心から主に感謝して、主に献げたいと願っている中で、初めて主にある豊かさを知ることができます。もし二心であれば、それは偽善であり、そこには喜びも楽しみもありません。二心は、清めなさいと、ヤコブは手紙の中で戒めています（4:8）。

以上、交わりのいけにえでした。主イエス様との交わりをみなさんは楽しんでいるでしょうか？まず、悔い改めて、自分の心をイエス様の流された血で清められてください。そして、自分が貧しい者であることに気づき、この方から豊かさを買うのです。そうすれば、主が共に食事をしてくださいます。